The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書
Author(s)	榎本, 剛士
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102260
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書[1]

榎本　剛士

１．現在地の確認

本稿は、「『クロノトポス』について」（榎本 2022）、「『クオリア』について」（榎本 2023）という形で積み重ねてきた「コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察」の延長線上に位置し、記号論に基づく包括的な「コミュニケーション分析」の枠組みを構築することを最終目的に据えた、さらなる理論的覚書である。

まず、上記「積み重ね」を経た現在地を確認することから始めよう[2]。「クロノトポス」は、ミハイル・バフチンによる概念で、文学において芸術的に表される、時間的・空間的関係の本質的なつながりの謂である (Bakhtin 1981)。文学（小説）の形式的に構成的な (formally constitutive) カテゴリーである「クロノトポス」において、時間的・空間的標識は、一つの注意深く考え抜かれた、具体的な全体に融合し、時間は厚みと形を持つ (thicken, take on flesh) に至り、芸術的に可視化され、空間もまた、時間、プロット、歴史的な性格を帯びる (ibid.)。このような特徴を有する「クロノトポス」は、ジャンルやジャンル間の区別を定義するだけでなく、それがかなりの程度、人間（登場人物）のイメージを決定する限り、人間のイメージは本質的に「クロノトポス」的であると言える (ibid.)。

特に 2010 年代以降、「クロノトポス」概念は、社会言語学や言語人類学の分野でも援用され、異なる時間的・空間的コンテクスト化がもたらす異なるアイデンティティ・社会的関係の現れを分析する際の有効な枠組みとなっている。しかし、より重要な点は、バフチンが時間と空間の本来的なつながりを論じる時、そこには、「意識の歴史 (history of consciousness)」や「精神 (mind) による経験の組織化」といった、高度に哲学的な問題があること (Clark & Holquist 1984)、そして、独自の原理から成る二つの相（「カテゴリー」と「行為」）の存在を前提としたうえで、両者の相互的な原理的独自性と相互依存・浸透との両立を梃子とし、両者を含みこんだ、より大きな統合を捉えんとする新カント主義的構図（cf. 小山 2014）があることである。

コミュニケーションを取り巻き包含する時間的・空間的コンテクストに同時に言及できる概念として、「クロノトポス」は確かに強力ではあるが、原理（哲学）的な考察不在の、分析に特化した（やや道具的な）援用は、「人間」や「世界」のあり様の根源にある、「クロノトポス」としか名付けようのない、しかし、文字通り「時空間」と安易に言った瞬間に我々の理解をすり抜けていってしまうような、（恐らくバフチンが真に問おうとした）重要な何かを後景化させるかもしれない。このことに注意をはらいながら、榎本（2022）では、「少なくとも一つの『相互行為のテクスト』[3]の軌跡 (trajectory) が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場」と

---

[1] 本稿は、科学研究費助成事業学術変革領域研究 (B)「言語相互行為における身振りと手話を対象とした身体記号学」（領域代表者：坊農真弓）における「音声会話に伴う身振りを対象としたマルチモーダル記号論の構築」（22H05013、研究代表者：高梨克也）の支援を受けて行った研究の一部である。文字通りの「覚書」であり、精緻化、分析への適用については、今後の課題とする。

[2] 詳しくは、榎本（2022, 2023）を参照されたい。

[3] 「相互行為のテクスト」とは、コミュニケーション参加者たちの間に立ち現れる、相互の（社会（集団）的）結びつきの含意や帰結に関わる構造（モデル）のことで、この再帰的（メタ語用的）モデルは、コミュニケーションの進展とともに刻一刻と変化する (Silverstein 2007)。

いう「クロノトポス」の定義を試みた。

次に取り上げたのが、近年、言語人類学において着目されている「クオリア」である。「クオリア」は、パース記号論で「第一性の事実 (facts of firstness)」として位置づけられるが (EP 2: 272)、言語人類学では、「それに対して／それに関して／それを巡って人々が志向 (orient to)／コミュニケーション (interact in terms of)／グループを形成 (form groups around) するような、文化的に概念化された質感の実際の現れ（具現化）」(Harkness 2014)、「（臭さ、温かさ、硬さといった）抽象的な質の感覚的な事例であると再帰的に理解される記号として、人間の活動において認識可能な形で具現化する指標記号」(Harkness 2015) と定義される。ここで言う「質の現れ」としての「クオリア」は、単なる「物の属性としての質」というよりも、「社会・文化的生活の事実」(Chumley & Harkness 2013) として、コミュニケーション・行為の中で、コミュニケーション・行為を通じて、再帰的に経験されるものである。「いかなるコミュニケーションも、社会・文化的にジャンル化されている」[4]という言語人類学のテーゼを受け入れるならば、「クオリア」は、そのような出来事に参加することを通じてのみ、経験可能である。換言すれば、特定のコミュニケーションにおいて、「何か」が社会・文化的に関連があるもの（コミュニケーションのコンテクスト）として指し示され、対象化されるプロセスに、コミュニケーション参加者が身を投じる（巻き込まれる）ことではじめて、「そのものの質（感）」としてメタ語用的に経験される（アクセス可能となる）のが、「クオリア」である (Harkness 2017)。

ここからが、問題である。以下のように定義される「クロノトポス」と「クオリア」を並置させた時、何が浮かび上がってくるだろうか。

> 少なくとも一つの「相互行為のテクスト」の軌跡 (trajectory) が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場
>
> それに対して／それに関して／それを巡って人々が志向 (orient to)／コミュニケーション (interact in terms of)／グループを形成 (form groups around) するような、文化的に概念化された質感の実際の現れ（具現化）
>
> （臭さ、温かさ、硬さといった）抽象的な質の感覚的な事例であると再帰的に理解される記号として、人間の活動において認識可能な形で具現化する指標記号

「クオリア」は、一定の社会・文化的価値づけや評価を伴う、社会・文化的に認識可能なものの現れに付随すると考えられる（例えば、臭い服、温かいコーヒー、硬いダイアモンド、うるさい声、など）。では、「志向／コミュニケーション／グループを形成する」の部分をどうするのか。この部分について、「クオリア」（あるいは、それに相当する何か）に関する問いを立てることはできないだろうか。このような疑問を出発点として、「クロノトポス」に結びつけながら思考を展開していくと、「『相互行為のテクスト』の軌跡に巻き込まれる感じ」にたどり着く。つまり、「『クロノトポス』について」から「『クオリア』について」という道筋を経て、「コミュニケーション」（の分析）に関わる理論的考察を積み重ねていくと、それは両者の接合を誘起し、さらに、その

[4] ここに、「クロノトポス」と「クオリア」の接合可能性（および、その必要性）が見出される。

接合は、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」という形を（一つの可能性として）とるのではなかろうか。

２．言語人類学的コミュニケーション論と「マルチモーダルな記号過程」

そうであるならば、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」へ向かっていくための羅針盤をどうするか。ここで（も）まず、言語人類学のコミュニケーション論が大きな道標となる[5]。

Silverstein (1993) や小山（2008）で示されている通り、言語人類学のコミュニケーション論（小山（2008）では「出来事モデル」と呼ばれている）は、生起した出来事とコンテクストとの結びつき、および、そのような結びつきを統制する「メタ語用」的記号過程によってもたらされる、社会・文化的に認識可能な結束性（テクスト）の生成に関する一般理論である。そして、様々な記号によって指し示され（得）る「コンテクスト」は、コミュニケーションの「今・ここ」を中心として、「今・ここ」の近傍に位置する（話し手・聞き手といった）コミュニケーション参加者から、遠方に位置する宇宙観・世界観・イデオロギーに至るまで、（指標性の原理に基づく）同心円を成している、と考えられている。

このような理論化の基盤となっているのが、パース記号論である。特にパース記号論の「指標性」に着目し、語られる出来事・発話出来事との関連において文法範疇を分類したヤコブソンの枠組み (Jakobson 1957 [1971]) を社会・文化の分析に接合した Silverstein (1976) は、言語と社会・文化の実質的な接点が、「言及と述定」に特に貢献する言語の「象徴記号 (symbol)」としての次元にではなく、非言及指示的な様態で特定のコンテクスト的局面を指し示すような、あるいは、特定のコンテクスト的要素が定まらなければその言及指示対象を特定できないような（レジスター、転換子といった）「指標記号 (index)」としての次元にあることを見出した。その後、言語人類学において、この枠組みに基づく膨大な民族誌的研究が蓄積されていったことは、周知の通りである。

しかし、当然ながら、我々の社会・文化コミュニケーションは「マルチモーダル」であり、そこに関与する記号は「言語」に限定されるわけではない。マルチモーダル相互行為分析や（最近の）会話分析の研究成果を参照するまでもなく（参照すれば、より明白な通り）、我々のコミュニケーションには、目線、体の向き、頭・手・足の動き、指さしといった「身振り」も深く関わっている。日常のコミュニケーションにおいて、ある参加者の身振りが進行中のコミュニケーションに関連する何かを指し示し、他の参加者がそのような指し示し（指標）をその場で実際に読み取って、何らかの反応をしている、というコミュニケーション的状況は、全く想像に難くない。つまり、コミュニケーションにおいては、言語や身体動作を含む様々な記号の生起、そして、それらに媒介されながら関連づけられる様々なコンテクスト的要素が謂わば「渾然一体」となって、（様々な）「テクスト」（あるいは、コミュニケーションのアーキテクチャ）が生み出されていると考えられ、そのような側面を捨象したコミュニケーション分析は、分析としての全体性を獲得することはできないだろう。

確かに、言語人類学である以上、上記の理論化が、言語と社会・文化との間の実質的な接点に関わることは否定し難い。では、パース記号論に基づく言語人類学のコミュニケーション論は、

[5] このような（理論的想像力の）拡張の受け皿になることができるところに（も）、パース記号論を基盤とした言語人類学的社会記号論の本懐がある、と筆者は考える。

言語に特化し、身体（身振り）の記号的側面を排除するような理論なのか。決して、そうではない（そうであってはならないし、そうであるはずがない）。もしそれが、社会・文化的に認識可能な結束性（テクスト）の生成に関する一般理論ならば、むしろそれは、「結束性の生成」に貢献する様々な記号の正当な取り分を認め、身体動作や、身振りの指示対象物（の配置）といった要素[6]もコミュニケーション過程の重要な一部として呼び込む（呼び込まざるを得ない）理論である（高梨・坂井田・安井・山本・榎本 2024）。そして、その「呼び込み」を体系的に許容するのもまた、理論にすでに埋め込まれているパース記号論である。

３．記号とコンテクストの結びつきの堆積と統合

さて、コミュニケーションにおいて使用される言語、生起する身振り、両者を「記号」として同等に位置づけながら、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」を射程に収めることができるような枠組みは、どのような様相を呈することになるのだろうか。その全てを記述しきることは、本稿の目的（現時点での筆者の能力）を大きく超えているが、鍵となると思われる視点や概念をいくつか書き残しておきたい。

まず、「テクスト」と「コンテクスト」との間の関係を「パントマイム」に見立てて理解する Silverstein (2023) の視座である。実際のパントマイムを具体的にイメージしてみて欲しい。パントマイムにおいて、そのパフォーマーは、見る側がマイムの「カウンターパート」として投影する（供給する）必要があるコンテクスト（マイム全体の解釈を行うための、身体の動きに対するあらゆる補完的なもの）、および、そのようなコンテクストが厚みを増していくプロセスに浸ることになる。つまり、身体の動きが、認識可能な形で、徐々に結束性を獲得していくプロセスは、そのような結束性を担保する枠組み（コンテクスト）が徐々に定まっていく「もう片方の効果」(counterpart effect) と表裏一体である。そして、そのようなコンテクストは、パフォーマーと観衆の両者を同じ（解釈上の）社会空間に存在する者として枠づけるとともに、こうして（成功裏に）進行していくマイムは、心情・感情を表現する（あるいは、見る側に特定の心情・感情を植え付ける）ことさえ、できる (ibid.)。

このような基本的な視点を踏まえたうえで導入したいのが、グッドウィンによる「文脈的統合態」(Goodwin 2018)、および、モンダダによる「マルチモーダル・ゲシュタルト」(Mondada 2016) という概念である。「文脈的統合態 (contextual configuration)」とは、コミュニケーション参加者が行為を構築する際に明確に注意を向けている、言語表現の構造、プロソディ、目に見える身体の動きといった、特定のモダリティにおいて組織化される特定の記号（作用の）形式 (specific forms of semiosis) の組み合わせが「セット」になったものである (Goodwin 2018)。また、「マルチモーダル・ゲシュタルト (multimodal Gestalts)」は、（テーブルに被さるような体の傾き、伸ばされた腕・手・指、モノの操作といった）関連する詳細な動作のパターンと、特定の相互行為的連鎖の環境における特定の言語表現と身体の姿勢とが相俟って構成するもので、言及指示のみならず、ターン・連鎖・共同で行われる行為の組織化、および、そこでの社会的関係の（言語のみならず、身体によっても媒介される）マルチモーダルな交渉のあり様に関与する (Mondada 2016)。

ここで、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」は、上述のパントマイムで言うと

[6] これらの要素は、1960 年代の中頃に旗揚げされた「コミュニケーションの民族誌」においてすでに、十分、認識されている (Hymes 1972)。

ころの「身体の動き」の側における「統合」「ゲシュタルト」に主に焦点を当てた概念であることに留意することが有益、かつ重要である。様々なモダリティにおいて具現化する記号の形式は、それぞれ単独にではなく、コミュニケーションの進展に絶妙に同期した「統合態」「ゲシュタルト」として経験される、とする視座は、コミュニケーションの動的な「全体」を射程に収めるうえで不可欠であると思われる。では、これら「統合態」「ゲシュタルト」の「カウンターパート」、すなわち、「もう片方の効果」（上記参照）として、何を措定すればよいのか。ここで、（マルチモーダル相互行為分析や会話分析で言われるところの「行為」や「アクティビティ」も含むことができる概念として）「ダイナミック・フィギュレーション」(Silverstein 2023) を援用することができるだろう。

「ダイナミック・フィギュレーション」は、「儀礼」の根幹を成す記号作用であり、(a) 時間・空間的、社会的コンテクストにおいて、（言語を含む）儀礼的行為を通じて蓄積されるテクスト化された形式と、(b) 社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系との間の一致・対応関係をコミュニケーションの中で生み出す[7] (ibid.)。このプロセスは、特に言語を含む複数の記号的なチャンネルを横断する形で、時間・空間における動きを実現 (enact) しながら、コミュニケーション参加者を特定のルールに基づいて、特定の（社会的）役割を担うように動員する (ibid.)。そして、その結果として、コミュニケーションの中で、コミュニケーションを通じて、コミュニケーションそれ自体が、社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系によって、当該の儀礼がこの世界にもたらすものとされている変容の「ダイアグラム（指標的類像）」となり、そのような変容を記号論的に描き出す、つまり、「今・ここ」に顕現させるのである (ibid.)。

４．何が「行為の背中」を押すのか

ここまで、生起する記号の形式に関わる「統合態」「ゲシュタルト」を措定し、そのような「統合態」「ゲシュタルト」の「カウンターパート」、および、両者の相互嵌入プロセスを射程に収める概念として、「ダイナミック・フィギュレーション」を導入した。

前節ではかなり抽象的な記述を行ったが、実際の事例に照らし合わせながら考えてみよう。以下は、日本科学未来館（東京都江東区）において収録された科学コミュニケーター（SC）と来館者の日本語会話に ELAN によるアノテーションが（部分的に）付されたマルチモーダルコーパス「未来館 SC コーパス」からのデータである。この場面では、SC（各画像左端）が来館者に対し「宇宙を調べる方法」を説明している。方法が「大きく分けて三つ」あることに言及し、「理論（計算）」に続く二つ目の方法について「コンピューターを使ってシミュレーションするのと」と言い終えたところで（画像 1）、SC は、一歩下がる、特定の方向に顔を向ける、特定の方向を指さす、特定の方向に踏み出す、といった身振りを伴いながら「もう一個、使ってるのが、ああいう」と続ける（画像 2）。この間、二人の来館者は、SC が志向する方向と同様の方向に顔や体を向ける形で反応し、「ああいう」という言葉を聞いたところでゆっくりと歩き出（す一歩目を踏み出）している。そして、「ああいう」の後、「望遠鏡」という言葉を受けて、来館者の（ゆっくりとした）歩みはよりリズミカルになり、全員が歩調を合わせて歩いていく（画像 3）。

[7] より簡潔に示せば、(a) が (b) の「具体的な現れ」として自らを呈示するような記号過程、と言えるだろう。

画像 1

画像 2

画像 3

時間にして約 5 秒の出来事[8]だが、ここにおいて、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」の具体例を見出すことができるように思われる。まず、「もう一個、使ってるのが、ああいう」という SC の発話と、それに伴う、一歩下がる、特定の方向に顔を向ける、特定の方向を指さす、特定の方向に踏み出す、といった SC の身振りは、それぞれが単独に、互いに切り離されて無関係に存在しているのではなく、相互に結束した「統合態」「ゲシュタルト」を形成していると考えられる。ここで重要なことは、これらの記号（作用の）形式が「統合態」「ゲシュタルト」を形成していく過程と同時進行で、それらが指標的に指し示す対象もまた、無矛盾的に堆積している点である。具体的には、「一歩下がる」が指標する「空間」「（開けた）視界」、「顔の向き」や「指さし」が指標する特定の「方向」、それらと同じ方向への「踏み出し」が指標する「動き（モメンタム）」が、形式の「統合態」「ゲシュタルト」のカウンターパートとなる、対象の「統合態」「ゲシュタルト」を形成する時、それは、特定の空間を通り、特定の方向へ向かう「動きの表象」を形成する。

ここで、「ああいう」という遠称の指示詞（ダイクシス、転換子）を通じて、向こうの方にある何か[9]が「コミュニケーションの今・ここ」に結びつけられた時、二人の来館者の足が動き出す。「ああいう」を通じて、上記の「動きの表象」の具体的な基点と終点が決まったことにより、「足の動き出し」を引き起こすに十分なコンテクストが定まり、実際の「足の動き出し」は、その指標的類像である、と理解することができる。さらに、目的地として措定された「モノ」が「望遠鏡」（三つ目の方法）であることが開陳されると、SC と来館者は、それに向かって歩調を合わせて歩いていくが、この時点での「歩調を合わせた歩み」と、直前の「足の動き出し」は、質的に大きく異なる。

徐々に形成されてきた形式の「統合態」「ゲシュタルト」と、そのカウンターパートとなる「動きの表象」は、「ああいう」という指標的言語範疇の生起を通じてコミュニケーションの「今・ここ」に投錨され、そのような投錨が、「足の動き出し」を結果（効果）として生み出した。そして、「望遠鏡」という「宇宙を調べる方法」が関連づけられることで、その動きは一気に社会・文化的性格をまとい、「次の展示」に向けた「移動」となる。つまり、コミュニケーションの中で徐々に形成されてきた「統合態」「ゲシュタルト」が、「『〇〇館』で専門的な知識を持つスタッフの説明を聞きながら展示を見て回る」という「社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体

---

[8] この場面に関する「相互行為のマルチモーダル分析」については、坂井田・坊農・牧野（2020）を参照。本稿で提示した枠組みに基づく詳細な分析（記号論的なアノテーション）は、稿を改めて取り組むこととする。なお、本稿が目指している記号論的な分析は、マルチモーダル分析を排除するものではなく、ところどころで重なる（しかし、「カウンターパート」を措定し、「ダイナミック・フィギュレーション」にまで踏み込む点において大きく異なる）ものである。

[9] 二人の来館者が立っている地点から SC が指さす方向を見た時、明らかに際立つモノが現に空間的に存在しており、それがまさに、「望遠鏡の模型」である。

系」と一致し、前者が後者の「ダイアグラム」（具体的な現れ）として自らを呈示することで、「身体」「言語」を巻き込んだ指標的記号過程が（より強固な）メタ語用的統制を被り、「次の展示物への移動」という（ジャンル化された）行為への「一押し」を媒介する、という記号論的プロセスを措定できるのではないか。

さらに、ここから踏み込むべき問題として、「行為の感じ」が残っている。上記のプロセスにおいては、社会的行為の表象としての「行為の図像」とでも呼べるものが関与しているが、パースによれば、「概念は、ダイアグラム、あるいは、アイコンの、我々に対する生きた影響であり、そのいくつかの部分が、思考において同じ数の感情 (feelings) や観念 (ideas) に結びついている」という (CP: 7.467)。さらにバフチンは、実際に生み出される発話には、「意味と評価を生み出す感じ (feeling)、すなわち、一人の人間の全体として、動き、位置を取る感じ」が伴うことを指摘している (Bakhtin 1990)。

このような、パースとバフチンによる視座と、本稿で論じてきた「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」を掛け合わせると、次のようになろう。コミュニケーションにおいて、特定のモダリティにおいて組織化される特定の記号（作用の）形式は「統合態」「ゲシュタルト」を成し、そのカウンターパートとして、それらの形式が指し示す対象の「統合態」「ゲシュタルト」が同時に生成される。そして、それが、社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系に属する「行為のモデル」との一致・対応関係を持つに至る時、それは、モデルの「ダイアグラム」（具体的な現れ）として、自らを呈示するのみならず、その生きた影響として、「意味と評価を生み出す感じ (feeling)、すなわち、一人の人間の全体として動き、位置を取る感じ」を喚起し、そのような「全体」は、行為（の決断）に結びついた「動機的」なレリヴァンス（シュッツ & ルックマン 2015）となる。

５．方位の確認：社会指標的コミュニケーション論、ハビトゥス、記号論的現象学

社会言語学や言語人類学においてバフチン由来の概念が援用される際、その焦点は、言語の社会的側面、イデオロギー的負荷（を基盤とする対話性）、階層性、多声性に当てられがちである。しかし、バフチンの著作を読むと、随所に「全体 (“whole(ness)”)」という言葉が出てくることに気づく (Bakhtin 1986)。「クロノトポス」から出発し、「クオリア」を経由した「理論的基礎考察」は、本稿において「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」へ寄港し、「行為の感じ」「行為の生成過程」を包含する「全体」を遥か遠くに臨みながら、再出発したところである。

最後に、重要な方位をいくつか確認しておこう。まず、パース記号論を基盤とした言語人類学の社会記号論（社会指標的コミュニケーション論）は、基本的な視座として保持することが有効である。言語と社会・文化の実質的な接点への記号論的まなざしはそのまま、言語以外のモダリティにも拡張可能である。さらに、そのような接点を「コミュニケーション」を基点として理論化する枠組みである限り、言語人類学の社会記号論は、コミュニケーションに関与する様々な記号（過程）を包含するための理論的拡張力を、パース記号論を通じて獲得し続けることができる。

そして、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」を「身体」や「感じ」に結びつける際に見落としてはならない視座を提供してくれるのが、ブルデューの「ハビトゥス」である。ハビトゥスは、「知覚・評価・行動図式のシステムが実践的認識行為―それら行為が反応すべき、条件付きで慣習的な刺激を見分け認知することの上に成り

立つ実践的認識行為―を遂行することを可能ならしめる」、また、「状況を、意味を付与された全体として構築することを可能ならしめる」、「歴史の産物」、「世界の諸構造と諸傾向の身体化の所産」である（ブルデュー 2009）。本稿が目指す「全体」は、コミュニケーションの社会・文化・歴史的プロセスから切り離されたいかなるものにも還元されてはならず、あくまでコンテクスト化された行為をめぐる記号過程として探究され（続け）なければならない。

加えて、より正面から身体に記号論的（哲学的）に迫るために、「記号論的現象学 (the semiotic phenomenology of communication)」(Catt 2017) の観点を積極的に取り入れることも、考慮に値するだろう。Catt (2017) は、「記号としての身体 (body as sign)」という視座を明示的に打ち出しており、そこで言及される、パース、ベイトソン、メルロ＝ポンティ、ヤコブソン、サピア、ブルデューといった知的資源は、本稿が拠って立つところでもある。コミュニケーション理論として、言語人類学の社会記号論と突き合わせた時、共約可能性・不可能性の両面が浮かび上がってくることが予期されるが、本稿に認めた理論的考察を進めていくうえで、「記号論」と「現象学」という二本の補助線を常に意識化できることは極めて建設的であろう。

以上、未だ粗いものではあるが、「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書として、繰り返し立ち返りながら精緻化・更新していく「原案」のようなものは生み出せたと思う。もちろん、俎上に載せたい名前、概念は尽きないが、「コミュニケーション」の全体、より正確には、「コミュニケーションの経験」の全体に向けた、小さな一歩となっていることを願い、信じつつ、本稿を閉じる。

参考文献

Bakhtin, Mikhail M. (1981) “Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics,” The Dialogic Imagination, ed. by Michael Holquist, 84-258, University of Texas Press, Austin, TX.

Bakhtin, Mikhail M. (1986) Speech Genres and Other Late Essays, ed. by Carl Emerson and Michael Holquist, University of Texas Press, Austin, TX.

Bakhtin, Mikhail M. (1990) Art and Answerability: Early Philosophical Essays by M. M. Bakhtin, ed. by Michael Holquist and Vadim Liapunov, University of Texas Press, Austin, TX.

ブルデュー，ピエール (2009)『パスカル的省察』加藤晴久（訳）藤原書店．[Bourdieu, Pierre (1997) Méditations Pascaliennes, Éditions du Seuil, Paris].

Catt, Isaac E. (2017) Embodiment in the Semiotic Matrix: Communicology in Peirce, Dewey, Bateson, and Bourdieu, Fairleigh Dickinson University Press, Madison, NJ.

Chumley, Lily H. and Harkness, Nicholas (2013) “Introduction: Qualia,” Anthropological Theory 13(1/2), 3-11.

Clark, Katerina and Holquist, Michael (1984) Mikhail Bakhtin, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge.

榎本剛士 (2022)「『クロノトポス』について：コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察」『言語文化共同研究プロジェクト ことばと社会（１）』，21-30 頁.

榎本剛士 (2023)「『クオリア』について：コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察 II」『言語文化共同研究プロジェクト ことばと社会（２）』，1-10 頁.

Goodwin, Charles (2018) Co-Operative Action, Cambridge University Press, Cambridge.

Harkness, Nicholas (2014) Songs of Seoul: An Ethnography of Voice and Voicing in Christian South Korea, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.

Harkness, Nicholas (2015) “The pragmatics of qualia in practice,” Annual Review of Anthropology 44, 573-589.

Harkness, Nicholas (2017) “The open throat: Deceptive sounds, facts of firstness, and the interactional emergence of voice,” Signs and Society 5(S1), S21-S52.

Hymes, Dell (1972) “Models of the interaction of language and social life,” Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication, ed. by John J. Gumperz and Dell Hymes, 35-71, Basil Blackwell, Oxford.

Jakobson, Roman (1971 [1957]) “Shifters, verbal categories, and the Russian verb,” Selected Writings II, 130-147, Mouton, The Hague.

小山亙 (2008)『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』三元社.

小山亙 (2014)「記号／運動―文字、肖像、増殖、文化、その断片 消えてしまった新しい人へ」『異文化コミュニケーション論集』第 12 号，45-64 頁.

Mondada, Lorenza (2016) “Challenges of multimodality: Language and the body in social interaction,” Journal of Sociolinguistics 20(3), 336-366.

Peirce, Charles S. (1931-1958) The Collected Papers of Charles S. Peirce, 8 Volumes, ed. by Charles Hartshorne, Paul Weiss and Arthur W. Burks, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA [cited as CP].

Peirce, Charles S. (1998) Essential Peirce: Selected Philosophical Writings, Volume 2 (1893-1913), ed. by The Peirce Edition Project, Indiana University Press, Bloomington [cited as EP 2].

坂井田瑠衣・坊農真弓・牧野遼作 (2020)「『次の場所まで歩く』ことの相互行為的組織化：科学コミュニケーターによる来館者誘導の身体的プラクティス」『質的心理学研究』第 19 号, 7-25.

シュッツ，アルフレッド，ルックマン，トーマス (2015)『生活世界の構造』那須壽（監訳）筑摩書房． [Schütz, Alfred and Luckmann, Thomas (2003) Strukturen der Lebenswelt, UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz].

Silverstein, Michael (1976) “Shifters, linguistic categories, and cultural description,” Meaning in Anthropology, ed. by Keith H. Basso and Henry A. Selby, 11-55, University of New Mexico Press, Albuquerque, NM.

Silverstein, Michael (1993) “Metapragmatic discourse and metapragmatic function,” Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics, ed. by John A. Lucy, 33-58, Cambridge University Press, Cambridge.

Silverstein, Michael (2007) “How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning,”『異文化コミュニケーション論集』第 5 号，31-60 頁.

Silverstein, Michael (2023) Language in Culture: Lectures on the Social Semiotics of Language, Cambridge University Press, Cambridge.

高梨克也・坂井田瑠衣・安井永子・山本敦・榎本剛士 (2024)「相互行為中の身体動作を対象としたマルチモーダル連鎖分析から身体記号学へ」『社会言語科学会第 48 回大会発表論文集』, 391-400 頁.